欲、欲、欲の心でした。今、目を閉じて私が私と対話できる時間があります。自分の心で語り合える時間があります。自分に思いを向けたとき、私は幸せだと少しでも思えるそんな時間があります。いっぱいいっぱい望んできました。目を閉じて田池留吉を思う時間があることが一番幸せなんだと思います。

何が幸せで、どうすれば幸せになるのか、どうなったら私のこの心は満足するのか、そう思って一生懸命やってみました。一時の充足感が得られました。しかしその後ですぐに襲ってくるのは空しさ、不安でした。心が満たされない、何で何でと心が定まりませんでした。心が荒(すさ)み 干からびていることを感じていました。だけど弱音なんか吐きたくなかった。グチグチブツブツの私なんて認めたくなかったのです。幸せで充実している時を過ごしているっていう証拠が私には必要でした。まったくばかげていました。どうしてそこまで飾らないといけないのか、決して同類だとは認めたくはありませんでした。

生まれて死んでいく時間の中で、見たくない許したくない自分を少しでも受け入れることができたなら、それで私の人生、丸でした。何も持たなくても、何も求めなくても心の底から自分をいとおしいと思えたならそれでよかったんだと思います。心が満たされない、心が寂しい、心を癒してほしい、みんなみんな過去からずっと生き続けてきた心の叫びでした。田池留吉に心を向けるとき、その心の叫びは一斉に飛び出してきます。押さえ隠し続けてきたけど、もうどうすることもできなくなりました。今世受け入れる以外には道は残されていません。